それが俺らの青春さ

vol.6

＜目次＞

【テーマ：フリー】
詩　Smile　２年　冬深信哉
小説　文明が終わる時　３年　碧星

【テーマ：橋】
詩　l'arc en ciel　２年　ねお
小説　橋の矛盾　３年　ジェノサイダー翔
小説　快感　２年　鴛鴦モナカ
小説　ふたりの　２年　律娘
小説　曼珠沙華　２年　赤琴かなで
小説　あいつがいた交差点　３年　碧星

【テーマ：Boy meets girl】
詩　ヒトメボレ　２年　冬深信哉
小説　夢見る男と獏娘　２年　四四九
小説　あなたがすきでした。　２年　律娘
小説　ここから始めよう。　２年　鴛鴦モナカ
小説　ＫＯハンマー　２年　赤琴かなで

※掲載されている作品はフィクションです。
実在の個人や団体とは一切関係ありません。

smile

全部　初めから知ってた
強がりな君のことだから
だけど気付かないフリをして
逃げてた僕は　臆病者

日が沈んでから　道の暗さを知る
一人で歩いて　街の明るさを知る
君と出会って　僕は優しさを知った
僕と出会った　君は

泣きたいときに泣けないような
不器用な君の側で
代わりに泣いてみせるからさ
そのかわり泣いてる僕の側で
大きな声出して　笑ってよ

多分　初めから泣いてた
強がりな僕のことだから
だけど気付かないフリをして
優しい君は　大事なヒト

夜が明けてから　陽のぬくもりを知る
二人で歩いて　在る喜びを知る
君と過ごして　僕は幸せを知った
僕と過ごした　君は

寂しい時に言えないような
不器用な君の側で
黙って話を聞くからさ
そのかわり俯く顔をあげて
大きな声出して　笑ってよ

泣きたいときに泣けないような
不器用な君の側で

代わりに泣いてみせるけどさ
たまになら泣いてる僕の側で
大きな声出して　一緒にさ
うるさいくらい　泣いてみせてよ

そのあとに一緒に泣きやんでさ
大きな声出して　笑おうよ

　今から幾らかが過ぎた未来。
　現代の発展途上国が国際的発言力を更に増し、日本・ドイツが国連の常任理事国入りを果たしていた。朝鮮半島は北朝鮮政府が革命で倒れ、再統一が実現した。また、エジプトや南アフリカといった南半球の国々も次々と経済発展を遂げて先進国と呼ばれるようになっていた。
　そんな頃、ＮＡＳＡが地球の軌道と交差し、地球に向かっている大型の隕石を発見した。それが地球に衝突するのは約一ヶ月後。ＮＡＳＡと米国政府は民衆が混乱するのを避けるためにこの情報を隠蔽し、解決方法を探る為に各国の宇宙開発組織の有識者を集め委員会を組織した。その会合は新しい案が出る度に、怒号が飛び交い紛糾を繰り返した。
　まずは大型のインパクタを隕石にぶつけて軌道をそらすというプロジェクトが実行に移された。
　アメリカ・ＮＡＳＡによって打ち上げれたオービタは隕石まで五十キロメートルまで近づき、インパクタを切り離した。しかし、インパクタの推進システムが上手く稼働せず失敗に終わった。またＥＳＡやＪＡＸＡなども同様の計画を実行し、インパクタを衝突させることには成功したがあまり効果はなかった。
　続いて、水素爆弾を載せたミサイルを隕石にぶつけた。これは表面の一部が砕けただけで大きな成果は上げられなかった。逆にそのため隕石の破片の一部が地球に流星として降り注ぎ、話題になってしまった。
　また、一般のアマチュア天文家がその隕石を見つけてしまうという事もあり、地球に接近している天体があるという噂がインターネットやクチコミで静かに広まりつつあった。中には軌道計算まで行った人が図とシュミレートの結果のデータをインターネットで公開し、衝突する可能性が高い事を指摘する人もいた。このデータはマスコミに引用されることもあった。
　結局、七日前になり各国の宇宙局が緊急記者会見を行い、文明が終わる可能性が極めて高いことが説明された。また、既に打つ手は打ったが効果がなかった事も説明されたが、逆に隠蔽していた事が大いに民衆の批判を浴び、政府が総辞職に追い込まれた国もあった。
　その翌日、更に悪いことに今度は観測史上最大の太陽フレアが観測され、それに伴う磁気嵐などが地球に向かっていることが判明した。それが地球に到達するのは３０時間後。再び緊急記者会見を開き、太陽フレアに関する発表とそれに伴い予想される被害が説明された。そもそも、これについては数年前から予想され、太陽を専門にする天文学者は対策を促していたのだが、一般への浸透が広がっていなかった。
　この２つの天文現象はいうまでもなく人々に打撃を与えた。ぶつける宛てのない怒りを持った人々の一部は凶悪事件を次々を起こし、宗教的な理由での集団自殺も相次いだ。それらの事件に加えて、国や宇宙局に対するデモが頻発し、道路が混乱した。時には、警察や軍隊が出動し、衝突するようなことも起きた。世界は「最後だから」という理由でほぼ無法状態になりつつあった。もちろん警察や軍もも全てには対応できず、機能していないのも同然となってしまった地域も出た。
　５日前。

磁気嵐が地球に衝突する１２時間前頃から電話やインターネット通信量が急激に増え、７時間前にはほぼ全ての回線が規制された。すると今度は爆発的に郵便物が増えた。最後まで人間は誰かと繋がっていることを望んでいた。

また新聞や雑誌には「地球の歴史」「人間の歴史」「文明の歴史」などといった特集を組み、それが如何にして誕生し、発展し、どのような様子で終焉を迎えようとしているかを記した。それなりに人気はあったが、どうして終わってしまうのにそんな事をするのか、という意見も多かった。

４日前。磁気嵐地球衝突。

ケーブルテレビ回線、光ケーブル、送電線、各種の電波装置などの大半が破壊され、地球上の通信を行うサービスのほとんどは停止せざるを得なくなった。また、送電線の破壊で電力の供給が停止したため、人々の生活は困窮状態に陥った。交通網は集中管理ができなくなり、公共交通も運休が相次いだ。

その夜、世界各地で磁気嵐によるオーロラが観測された。人生で最後で見ることになるであろうオーロラを見て、ある人は希望を持ち、ある人は諦めのため息を漏らした。

三日前。

大半の製造業や学校は休みとなった。

唯一機能する報道媒体となった新聞は飛ぶように売れると期待されたが、印刷にかかる電力が無かった。それでも一部の報道機関は活版印刷を用いて新聞を発行した。しかし、部数が少なかった為に値段は急騰した。高速道、一般道共に大規模な渋滞が幾つも起こり、事故が頻発した。また小さな隕石の数が増え、幾つかの建物の屋根を突き破り、死亡者も出た。

二日前。

一部の通信が回復し、アマチュア無線も活発にやり取りされた。そこでは「ハローＣＱ。どうが、貴方にとって素晴らしい最期を。さようなら」という言葉が交わされた。

一日前。

地球上のほぼ全ての経済活動が終わり、オフィス街はひっそりとしていた。逆に住宅街にある公園や学校のグラウンドでは大規模な集会が行われ、文明の最期を飾ろうとしていた。

当日。

街の大通りでは、人が集まりカウントダウンを始めていた。隕石がぶつかる時刻は秒単位で公表されていたからだ。隕石の姿が確認出来る場所では、人々はみな外に出るか、窓から外を見ていた。

また、アメリカやイギリスではある映画へのオマージュで四十二秒前にカウントダウンが始められた。

一瞬にしてすべてのものが舞い上がり、粉塵と化した。衝突地点から遠かった場所では、しばらくのタイムラグの後に空を灰が覆った。

植物は灰にやられ、緑は消えていった。

奇跡的に生き延びた人たちも、やがて飢餓で倒れていった。

もう、地球の文明は完全に終焉を迎えていた。

約5千万年後の地球。
偶然にも5千万年前の超弩級の隕石衝突の中、生き残った種が進化した生命が青い水と緑の陸に満ちた星を支配していた。
彼らは言葉を操り、物事を分類し、物質を産み出していた。また、彼らは五千万年前に知的生命体が存在していたことも発見していた。また、その発見が彼らの文明の進化を早めた。
そして自ら事をこう名乗った。

——Human being（人間）と。

l'arc en ciel

あまりにも真っ青な、空。
私とあなたは、繋がる術を持たない。
遠い日のあなたへ。
ー見て…。きっと離れていても、繋がっていられるよ。
そう、信じていたいのー
あの日と同じように、雨上がり、空を見上げてー。
私とあなたの唯一の記憶。
空に架かる橋。
どうか、あなたの元へ辿り着けるよう、私を連れ去って。

橋の矛盾

　とある国のそこそこ大きな橋の前。
　今日は世界的に見ては気にもならない小さなことだが、この小国にとってこのような催しは初めてだ。
「さて、皆さん。今日はお集まり頂き、ありがとうございます。」
マイクを持った礼服の男はその国の言語でそんなことを言う。その声に応えるかのように集まった２０００人前後の人々は大きな声を出す。
　彼らの前には、手すりが焦げ茶色になった少し大きめな橋が架かっていた。そしてその向こう側に綺麗な銀色の手すりの橋が架かっていた。まだ入口にはテープがかかっている。
「さて、この国の独立記念日３周年。あの日、この国の元国王が処刑されました。その日にたどり着くまでに多くの命が儚く散っていきました。しかし、今日は違います。安全で現代的でなおかつ新しい橋が架かるのです。独立したあの日とは違う歴史が生まれたのです。この国はまた一歩先進国へと近づいたのです。」
大衆から歓喜に近い声が聞こえる。
「それではもうそろそろ１５時になります。あと１０秒で渡れるようになりますからね。５、４、３…」
　観衆もカウントダウンに参加する。
「３、２、１…」
　１５時になった瞬間、テープが切られる。同時に手前の橋が爆発する。長年ここらの住民の道になっていたものが大きな音を立てつつ水に沈む。
　皆が皆、橋に向かって歩き出す。涙を流しながら向かう者もいるぐらいだ。この国の民らは一様に自分たちの手で新しい未来を創っていくことを再び誓ったのだ。

　沈んだ橋の下には数多くの塵芥が眠っている。それらはこの生まれ変わった国の黒い真実である。その真実とは、前の国の行いを悪と見なしたのと同じようなことをやったという証拠である。
　生まれ変わる前は己の正義を貫き通そうと必死だった。しかし、正義をこのような形で埋葬したのだ。
　前政権がやってきたことをそっくりそのままやったのだ。
　転生する前も、直前もその後も変わっていない。結局本質は何も変わっていない。
　あの大革命とは一体なんだったのだろうか。

　　この国は矛盾である。

快感

　ある男がいた。

　彼は、誰もが羨むお金持ちで、両親に愛され、妻も子供もいて、友達にも恵まれていた。
欲しいものは何でもお金で手に入れて、でもそれを自慢するわけでもなく、周りからはとても好かれていた。

でも、次第に自分にないものは何でも欲しがるようになっていった。
他よりも劣っていることはあってはならない。
自分が出遅れるなんてことはあってはならない。
彼はそう考えるようになっていった。

　彼は考えた。
本当に俺はもう全てを手に入れたのか。
もしそうでないとしたら、一体俺には何が足りないのか。

　《また、いじめによる自殺のニュースが入ってきました。》
ふとテレビからそんな事が聞こえた。
「自殺……？」

　彼は気付いた。
「そうか、俺になかったものは……。」

　「新しい無人島を買ったんだ。」
彼は突然、妻に言った。
「何のために？」
「自分だけの橋を架けるためさ。」
彼は嬉しそうに話した。
「気付いたんだ。俺にはまだ『美しい死』というものがなかった。俺にないものは何でも手に入れたいんだ！」
「何言ってるの？　冗談でしょ！？」
「冗談で島を買うわけがないだろう。」
「大体、どうして橋を架ける必要があるのよ！？」
「俺は考えたんだ。どうすれば『美しい死』が手に入るのか。俺だけの『美しい死』が欲しいんだ。」

「あ、あなただけの死……？」
妻は目の前の夫に恐怖すら感じていた。
「ああ。その辺のビルから飛び降りたり、首を吊ったりするのはありきたりだし美しくない。でも、自分の島で、自分の橋から飛び降りたら、それはそれは美しい俺だけの死が手に入るじゃないか！」
「ちょっと、正気なの！？　死んだら何もかも失ってしまうのよ？　あなたの考えと逆じゃない！」
「何言ってるんだ。『美しい死』が手に入れば、俺はすべてを手に入れたことになる。逆じゃないだろ？　俺にないものは全て手に入れたいんだ。」
彼は夢中だった。
あと１つで全てが揃う。
そのことしか見えていなかった。
ただ橋が出来るのを待ち望んだ。
もう誰が何を言っても、彼の心は少しも動かなかった。

　そして、ついに橋が完成した。

「とうとうやったぞ！！　これで俺はついに全てを手に入れることができる！！」
完成した橋を前に、彼は心の底から喜んだ。

「ママ、どうしてパパはあんなに喜んでいるの？」
「さ、さあ……ママにもわからないわ。きっといいことでもあったのよ。」
妻は子供の手を握った。
「ほら、パパは忙しそうだし、そろそろお家に帰りましょう。」
「パパは一緒に帰らないの？」
「パパはいいのよ、きっと遅れて帰ってくるわ。船が待ってるから早くしないと。」
「う、うん……。」

彼は寂しそうな家族には見向きもせず、子供のように橋に向かって駆け出した。

「やっと、やっと俺は手に入れることができる！　俺になかった『美しい死』を！！」
彼はそう叫び、橋の中央に立った。
柵をのりこえて細い足場から下を見下ろす。
遠くに地面がある。
そこを目指して、彼は柵から手を離し、とうとう飛び降りた。

風を感じながら、彼はこの上ない快感を感じていた。

「……パパ？」

ふたりの

君は僕から離れていくんだね。

夢ばかり見て、世間から見ればはみ出し者の僕から離れるんだ。

皮肉を言っているんじゃないんだ。本当に。

これから先、きっと誠実で僕と同じくらい君に愛を注いでくれる人を見つけてさ。

障害を二人で難なく越えて幸せに結婚をする。

僕に話していたように子供は男の子２人で郊外の小さな家に住むんだ。

幸せな時間を過ごして、緩やかに何の抵抗もなく歳をとって、

夫と子供と孫もいるかな、皆に囲まれて幸せな老後だよ。

僕から離れて行っても恨まないよ。

未練たらしく聞こえるだろうね。でも、そういう歯車だったんだ。

僕から離れても君は希望のある幸せな暮らしが待っているよ。

僕が保証するよ。

君と居る間は本当に幸せだったから、

僕を幸せにした君だから、保証できるんだ。

だから、今ここでこの橋の上でテンポよく握手をして

付き合い始めた時みたいに照れながら一瞬だけ唇を重ねて

お互いに反対方向に歩き出そう。

君は左、僕は右へ。

二、三度振り返ってもいいかもしれない。

これからも町で会うかもしれないけれど、その時は無言ですれ違う仲なんだ。

振り返った時、上手い事目があったら最後に笑って手を振ろう。

そこから僕らは他人になる。

僕は夢を追いかけて、君は幸せを保証される。

それでお別れする時のこの感情はチャラだよ。

それじゃあ、さようなら。握手をしよう。

橋から飛び降りた。

バシャン、と水飛沫をあげる。濡れたのは膝から下だけ。
とても浅い小川だったようだ。
どこか、残念な気持ちになる。
「見てたよ、貴方が橋から落ちるとこ」
後ろから声を掛けられて、跳び上がるかと思った。
振りかえってみるとそこには女性が一人。
数歩で渡れるような短い橋から、川の中にいる青年を眺めていた。
「どうして橋から落ちたの？」
「……緋翠の、妹のところに行けると思ったから」
ばしゃばしゃ水を蹴散らして岸に上がる。
濡れた服は一瞬で乾いてしまった。
ここで、今いる場所が現実でないことに気づく。
「ここはどこだ……？」
「川だよ」
「そんなことは分かってる。この世界だ」
「どこだと思う？」
話がかみ合わない。
いらついていることを表情に出すと、さすがに女性も苦笑いをした。
「ごめんね。本当にここは川だから、そうとしか言えないんだ」
「じゃあ、アンタは何だ？」
女性はきょとんとする。何もおかしいことを言ったつもりはないが、答えに困っているようだ。
「私は川で拾われたよ」
「は？」
「だけど私の帰る場所は貴方のとこ」
それが何かをはぐらかしているようには聞こえないがどうしてそんな返答になるのか。
しかし微笑んだ顔は、魅力的だった。
どこかでいつも見ていたような気がして——

強制思考停止。

「でもこれだけ言わせて」
頭の中が真っ白になっている青年に、女性は優しく言葉を与える。
「貴方は橋を渡って欲しくないよ」

泣いている、と思った。
この女性とはここで初めて出会ったが、彼女はそうではないらしい。
酷い自分をどうしてそこまで思ってくれているのだろう。
「……悪い。俺、アンタのことも、自分のことも思いだせない」
「仕方ないよ、貴方はいつも自分のことなんて興味なかったから」
「俺の、名前はなんだ？」
また、綺麗に微笑んでくれた女性。まるでその質問を待っていたように嬉しそうだ。
青年の名前は、秦朶と教えてくれた。
それから秦朶はいくつか自分自身の質問を続けた。
どんな性格だったか。どんな生活をしていたか。家族はいたのか。
秦朶からの質問を、女性は知っている限り細かく答える。
しかし、女性のこととなるとすぐに会話が成立しなくなる。
「どこでアンタは俺と会ったんだ？」
「川を眺めてたら、勝手に持ってったよ」
「そんな、物じゃないんだ」
「カナタ、もの凄く怒られても私を離さなかった。嬉しかったよ」
こう、例えるならば会話のドッジボールをしているともどかしくなる。
言葉に慣れていないのかもしれない、とも考えはじめた。
それから女性は橋から川の方を眺めながら静かに口を開く。
「一緒について歩いていたら、カナタ橋から川を眺めてね」
「……」
「時間が止まったと思ったの」
ばしゃーん。女性は自分で音を表現する。
儚げに秦朶を見つめるようになった女性は一体何が悲しくて何を訴えているのか。

猫が。

砂嵐の画面の中に三毛猫の姿を見た。
あれは、あれならば見覚えがある。
「川で拾った猫」
川で亡くした妹のお参りにいった時、河原で捨てられているのを拾ったことがあった。
運命的な気がして、緋翠が帰ってきた気がして。
彼岸花がゆらゆら揺れている道を通って帰る。
三毛猫が赤い花の中にいる姿がとても似合っていたことに感動し、それにちなんで名前を付けたのだ。
「(曼珠沙華で、シャケってのはどうだ？)」
それからシャケは秦朶と共にいることが多くなった。

橋の上を散歩していたのは、シャケと出会って一ヵ月たったくらい。
「(ちょうど緋翠の命日だった)」
その時秦朶は思ってしまったのだ。
今日の逢魔が刻に会いに行けば、きっと。
そして、橋から飛び降りた。

シャケが手を伸ばしていたのに。

「今なら届く？　私の手」
秦朶は、いつの間にかまた川に落ちていた。
今度もまた水深のない小川だった。
橋の上から女性が手を伸ばしてくれている。
「シャケ、なんだよな」
「貴方がそう思うなら」
なぜかその手を取ることに後ろめたさを感じた。
伸ばされたままで取り合わない、互いの手の間には橋がある。
「カナタ、まだしなないで」
女性、シャケは今度こそ大粒の涙を流した。
川に落ちて、小魚に変わって泳いでいく。
「雨に降られて、風にさらされている私を助けてくれたカナタ。知ってた、ヒスイを重ねてたの」
シャケは身を乗り出して、強引に秦朶の手を掴む。
ぐるん、回転する世界。
秦朶とシャケの立ち位置が変わっていた。
ここは川じゃない。秦朶が飛び降りた、夕日差し込む橋の上。
落ちているのは三毛猫のシャケ。秦朶は突然変化した状況に対応できなかった。
「カナタ、ヒスイはきっと元気。貴方にもっと生きて欲しいよ」
この絶望は、二度目だ。

ピ————。

心肺停止を告げる音。
目覚めて最初に見たのはまっ白い天井。
しかし、自分に繋がれた機械は規則的な音を発して心臓の呼吸を伝えている。
「結城さん、気分はどうですか」
看護婦と点滴を取り替えている時に目が合った。

ここは病院のようだ。
「どうして、こんなところに」
「覚えてないんですか？　結城さん、橋から落ちたんですよ」
一度は心臓が止まったこともあった、という。
それに秦朶は心当たりがあった。
「(あれは、三途の川だったんだな)」
夢の話だ。シャケに説教され、助けられた夢。
今度会った時にはお礼と高級ツナ缶をあげようと思う。
今、シャケはどこにいるだろう。
「結城さんって猫飼ってますか？」
「えっ……」
看護婦は唐突にそう切り出してきて、機械が一瞬不安定な音を奏でた。
それを気にして確認する看護婦は秦朶の不安も知らず話を続ける。

「結城さんが運ばれた時、近くで猫の交通事故があったんです」

心肺停止したのは、秦朶ではなかった。
退院した時にその現場に行ったが、既に跡形もなく日常があっただけ。
そのあと飛び降りた橋に向かった。
夕焼けで赤く染まった橋は、今日に限って人気がない。
橋から川を見下ろす。魚が泳いでいるかは分からなかった。
秦朶はあえて、事故現場ではなくこの橋の飛び降り場所に高級ツナ缶をお供えする。
彼岸花と曼珠沙華を川に投げた。
それからため息をついて、川ではなく夕日を眺めた。
何を考える訳でもなく。

もう繰り返すことは出来ないと思い知った。

最後まで死から離れられない青年の物語。

あいつがいた交差点　Memento mori

　スロープ付きの歩道橋。その真ん中で俺は人と待ち合わせをしていた。
　待ち合わせ時刻よりも２０分前からそこにいた。手すりに肘をついて、交差点を漠然と眺めていた。
　大型トラックが歩道橋の下を通り過ぎた。そして、思い出す。
　どうして、もっと早くこの歩道橋をつくれなかったのだろう、と。
　友達のＸ君の訃報を聞いたのは、幼稚園のなんとかルームという広い部屋だった。
　弟と母さんと一緒に三人でショッピングセンターに行った帰り道だったらしい。交差点で信号が青になって、横断歩道を渡ろうした時、トラックが曲がってきて、轢かれて亡くなったと……。母と弟は助かったらしい。そのトラックの運転手によれば、丁度死角になっていた位置にＸ君がいたのだという。その後、運転手がどうなったのかは知らない。
　その時、俺はそれがどういう意味だったのか、分からなかった。亡くなるという言葉の意味も知らなかったから。ただ、Ｘ君が俺らの幼稚園からいなくなった。それだけの変化しかなかった。
　話を聞いてからどれぐらいが経ったのか忘れたけれど、教会に行ったのをとても鮮明に覚えている。そこで園長先生の話があって、白い花を箱の中で眠っていたＸ君の傍に置いた。最後には、黒い車にＸ君の眠っている箱が乗せられて何処かへ走って行った。
　その時、誰かが先生にあの車は何処へ行くのかと訊いた。先生は何も答えなかった。今度は「Ｘ君は何処へ行くのか」と訊いていた。先生は、こう答えた。
　「天国への階段を昇るのです」と。
　でも、俺は何処かで彼は燃やされるというのを耳にした。それもどういう事か分からなかった。
　この時、分かっていたのはこの一連の式が「お葬式」である、ということだけ。
　亡くなる、や、燃やされる、といった言葉の意味を知ったのは小学校に上がってからの事だった。そして、死というものを理解できたのも……。
　「草太！」俊平の声がした。「久しぶり！」
　こいつが待ち合わせをしていた奴だ。彼はレンタサイクルに乗っていた。赤と藍の色から市観光案内所のレンタサイクルだと分かった。
　時計を見る。まだ待ち合わせ時間まで１０分もあった。
　「おっす！」俺は挨拶を返す。
　彼は首からプロが使うような黒い大きなカメラを提げて、肩に茶色のバックを掛けていた。
　しばらく、何も言わなかった。
　「そういえば、ここだったな……」彼が言った。「この歩道橋が造っている途中に起きたんだよな……。のろのろと造っていたのに、事故が起きてから急ピッチで造りやがって……」
　彼は提げていたカメラのレンズを交差点に向けて写真を撮っている。一度、シャッターを切る音がした。
　「それって、デジカメ？」俺は訊く。

「そう、デジタル一眼レフ」
「どんな写真が撮れた？」
「こんな感じ」そう言って、カメラの画面を俺に見せた。
白黒で、とても暗い印象の写真だった。どうしたら、こんな写真を撮れるのだろう？
「『メメント・モリ』だ」彼は言う。
「は？　どういうこと？」
意味が分からない。どこの言葉だろうか？
「死を、忘れるな。死を、想え」
死を、忘れるな。
死を、想え。
その言葉が反芻する。
そして、Ｘ君の記憶と繋がる。今も、俺は覚えている。
彼は、小学校の時に何処かに引っ越して、いろんな場所を転々としながら今は大阪に住んでいるらしい。それでも、Ｘ君の事を覚えている。
幼稚園が一緒だった奴らで何人が、覚えているだろうか。意外と少ないと思う。ふと思って、幼稚園から高校まで同じ奴にＸ君の事を聞いた事があるけれど、そいつは名前すらも覚えていなかった。彼女（その友達は女子である）からすれば、あの出来事はその程度のものだったのだろうか。数年もの時間がその記憶を消したとしても、やっぱり納得がいかない。
あれだけのことを……。
でも……。
俺は覚えている。
彼も覚えている。
よく考えてみれば、それだけでも十分でもないかと思えてきた。
二人の記憶の中でＸ君はいる。覚えている人が少なくとも２人いる。
「そういえば……」彼が言った。「誰か、僕と仲良かった奴で、引っ越した奴とかいる？」
「いないかなぁ。いや……、どうだったか……」
何故か、悔しく感じた。何人かが引っ越して行った事は覚えている。でも、顔と名前が思い出せない。たったそれだけの存在だったのだろうか？　それなら何故、彼の事は覚えているんだ？
「杉野勝也とか」その名前は覚えていた。
「勝也か……。何処に？」
「何処かの島だったと思う。淡路島じゃないけれど……」
「会いたいな」彼はまっすぐ俺を見て、笑った。
俺たちは歩道橋を下りた。
どうして、仲の良かった奴が引っ越した先もきちんと覚えていないのだろう。所詮、人の記憶はその程度なのだろうか？
「あ！　無くなったんだ……」彼が歩道橋からほど近い建物を見て言う。
俺は何も言わなかった。

あの日、Ｘ君が行ったショッピングセンターは近くに出来た「Ｍショッピングセンター」に客を奪われたのか、潰れてしまった。建物は別のお店になった。
「中のボウリング場は？」彼が訊いてきた。
俺は首を横に振った。
「あそこもか……」彼はそう呟いた。「何もかもなくなっていくんだな」
何も言えない。単に返す言葉が見つからない。間違っていないし俺もそう思った。
「川原に行こう。あそこなら変わっていないだろうから」彼はそう言った。
俺たちがよく遊んだ川原は、確かに変わっていなかった。そこは他の想い出の場所、例えば駄菓子屋とか、友達のお婆ちゃんが営む文房具店とか、そんな場所が消えていく中で、今も前も変わらず残っている場所だった。俺たちが小学校五年生ぐらいまでは盛り上がっていた神社の祭りも今は子供の数が減って規模が自然と小さくなってしまったし小学校も建て替えられた。
メメント・モリ。
死を忘れなるな。
死を想え。
それは、消えゆくものを忘れない、消えゆくものを想え、とも言えると思う。
彼の撮った暗い白黒の写真はとても深く、俺の目に焼きついた。

ヒトメボレ

彼女は　泣いていた
いつものように　顔を伏せて
僕に涙を見せないように　しゃくりあげて泣いていた

僕は何もできなかった

素直に言葉を紡ぐことのできない
不器用な僕は　君を傷つけた

それから僕らの間から会話は消えた
たまにちらりと彼女を見ると
彼女もこちらを見ていたが　すぐに目を逸らされた

こうして　彼女と出会って１年がすぎて
僕らは卒業を迎えた

もう一度時が戻らないだろうか
もう一度僕が初めて彼女を見た瞬間に戻せないだろうか

彼女の想い人が今も
僕であってほしいという願いはわがままだろうか

気がついたら思い出の場所にいた
彼女と迷いながら来た　公園の中

初めて二人で公園に来たあの日
彼女は僕に彼女の一番好きな歌を
プレゼントしてくれた

とても綺麗な澄んだ声で
愛の歌を僕だけに

今更こんなところに来たとしても
彼女にはもう会えないだろう
しかし　少しの可能性だけを僕は信じた

公園の中で僕はふと立ち止まる
彼女はどう思っているのだろう？

僕だけが彼女を望んでいて
彼女はもう　僕のところには戻る気はさらさらないとしたら

引き返そうかと思った
彼女がここに居たとして　それから？

諦め　という言葉が頭をよぎった

しかしそんな僕の考えとは裏腹に
自分の脚は歩きだしていた
本能は彼女に会いたいと思っているらしい

ならば　それに従おう

公園の中にある　小さな広場のようなところで
舞う桜を背景に　一人歌う少女がいた
長い髪が柔らかくなびいている
とても綺麗な声が風に乗って僕の耳に届いた

荒んでしまった心の底を
抱きしめてあたためてくれるような

不安と恐怖は　いつの間にか消えていた

思わず立ち止まり　目を閉じてみる
あの日の笑顔を思い出す

僕はここでまた出会えた奇跡を
運命だと信じた

胸がきゅうっと締まる

今なら彼女に言えること

何より誰より　伝えたい言葉

「大好きだ」

叫んだ

大きな大きな　声と気持ちで

自分の気持ちを素直に言うことを
恥ずかしいことだと思うのは　もうやめたから

僕の声を聞いた少女は振り返って僕を目で捉えた
確かにその目は潤んでいた

その少女はやっぱりそうだった

僕がずっと見ていた彼女だった

泣き虫で　素直じゃない　でも
世界で一番　大切な人

僕は今　また　桜を背景に歌う彼女を見て

【ヒトメボレ】したんだ

あの日の彼女にも　今の彼女にも
僕は一目で恋をした

夢見る男と獏娘

ふらふら、ふらふら、くぅいくぅい。
ふらふら、ふらふら、くぅいくぅい。
獏の娘がやって来た。
夢見る男のもとに。

「こんにちは。」
「ああ、こんにちはお嬢さん。」
「私はお腹が空いているのです。」
「そうかい。パンでも食べるかい？」
「いいえ。私は獏なのです。
残念ですがパンは食べられないのです。」
「ならばチーズはどうだい？」
「いいえ。獏は夢を食べるのです。
貴方のその夢を、一口かじらせて下さい。」
「僕の夢を？とんでもない。
夢が無くなったら僕は生きていけない。
夢は僕の一部なのだから。」
「そんなこと。一口でいいのです。
この小さな口の、一つ分でいいのです。
どうか、どうか食べさせて下さい。」

ふらふら、ふらふら、くぅいくぅい。
ふらふら、ふらふら、くぅいくぅい。
獏の娘は悲しそうに泣く。
掠れた声で寂しげに泣く。

「そんなに悲しそうに泣かないでくれよ。
じゃあ、この夢を食べさせてあげよう。
出来損ないで、薄汚れていて、もしかしたら
あまり美味しくないかもしれないが。」
「ありがとうございます。それで十分です。
お言葉に甘えて、いただきます。」

獏の娘はあうんと口を開け、
小さなマシュマロの様な灰色の『夢』を
これまた小さな口に押し込んだ。

そして十分に咀嚼し、ごくんと飲み込み、
深々と男に対して頭を下げた。

「ごちそうさまでした。」
「美味しかったかい？」
「とても面白いお味でした。」
「それは何よりだ。」
「それでは私はこれで。本当にありがとうございました。」

ふらふら、ふらふら、くぅいくぅい。
ふらふら、ふらふら、くぅいくぅい。
獏の娘は男のもとから立ち去る。
ゆらゆらとした足取りで。

獏の娘が去って、男は再び『夢』を作る作業に戻った。
今日は神様に頼まれた『夢』も作り出さなければいけないのだ。
変に小さく薄汚くなったけれど、喜んで受け取ってくれるだろうか。
そう思った男はふと、いやな予感が頭を過ぎったが、
気にしないことにして作業を続けた。

しかし、気にしてももう遅い。
その『夢』はもう既に、獏の娘の腹の中。

人類が願った明日。
もう明日はやってこない。
また今日が繰り返される。

ふらふら、ふらふら、くぅいくぅい。
ふらふら、ふらふら、くぅいくぅい。
《また》獏の娘がやってきた。
夢を生み出す男のもとへ。

「こんにちは。」
「ああ、こんにちはお嬢さん。」

その言葉が「また会えたね。」に変わるのは
いったい何時になるのやら。

あなたがすきでした。

僕と同じクラスの女の子。友達が休みで、一人で弁当を食べていたら、横からいきなりおかずをとられたのが出会い。
「あたし弁当忘れたんだわ。半分よこせ。」
それから何故だかいつも隣に居る。自己中で、我儘で男みたいな話し方。よく付き合ってるんじゃないかと周りには言われた。
「僕はこんなのはタイプじゃない。」
そう答えると膝に蹴りが入って喧嘩になった。そうでなくても僕たちは喧嘩ばかりしていた。
喧嘩のあとは二人でお菓子を割り勘して食べながら帰る。それが普通だった。
それなのに、いつの間にか女の子は隣に居なくなっていた。
話す事も少なくなっていた。休み時間には苦手だと言っていた携帯をいじり、昼休みは教室から消えていた。
ある日の放課後に文化系の部活の部室に居るのを見つけた。身体を動かすのが好きで、部活は色々と面倒で入りたくないと言っていたのに。
女の子は長い髪を三つ編みにしている子にひっついていた。
その子の眼鏡をかけたりと、ちょっかいを出してはひっついて、こちらに気がつくとへらっとした笑顔で手を振った。
「ちょっと待ってて。もう部活終わるから」
その日は久しぶりに二人で帰った。
赤いマフラーと赤い手袋は僕が誕生日にせがまれて買ったものだった。
他愛もない会話をして、すこし言い合いになったりして、前と変わらない帰り道だった。
女の子は途中で僕の服の裾を引いた。
「話があるんだ。」
自販機のホットココアを買ってから、近くの公園のブランコに並んで座った。
ココアを一口二口飲んでから女の子が口を開いた。
「あたしね、さっきの三つ編みちゃんが好きなんだ。」
恋愛対象として、そう言った。
別に同性愛に偏見はない。なのにショックだった。
そのまま、女の子は、彼女は
「今ね、あたしたちさ、付き合ってるんだ。」
何にも言えなくて、ただ俯いた。僕らは付き合っているわけではないし構わない気はしていた。
それなのに何も言えなかった。俯くしか出来なかった。
女の子は返事が無い僕を見てレズは気持ち悪いかと聞いた。
「そんな事はない。」
いつもよりも低い声で答えた。
「それならいいや。」
棒読みだった。そのまま数十分、何も会話はなく、ただ黙々とココアを飲んだ。

聞きたいことはあったはずなのに口は動かなかった。
公園を出るとき、女の子はまた『三つ編みちゃん』と付き合っていると言った。
それがレズは嫌いかという質問に聞こえた。
「好きなら良いじゃん。」
そういうとくしゃりと笑って有難うと言われた。口を開こうとすると女の子はくるりと向きを変えて走っていった。
途中で振り返って大声でバイバイと手を大きく振って、また走っていった。
女の子が走り去った後、鼻の奥がツンとした。そのまま空を仰いで泣いた。

　あぁ、なんだ。僕はあの子が好きだったんだ。

ここから始めよう。

　少年は１人の少女に出会った。
それはそれは美しい歌声の少女に。

　「今日もいい天気だね。」
少年は、森に１人で住んでいた。
気付けば少年はたった１人で森に立っていた。
自分の名前も、どうやって生まれたかすらもわからない。
でも、少年は寂しくなかった。
頭に、肩に、森の小鳥たちが降りてきてくれたから。

　「…ん？　なんの音だろう。」
ある日、少年は聞き覚えのない音を聞いた。
「誰かが、どこかで歌ってる…。」
自然と少年はその声に近づいていった。
少し奥に進むと、その少女はいた。
古いきりかぶに座って、本当に楽しそうに歌っていた。
少年は、その美しい歌声に思わず目を閉じた。
きれいで、純粋で、どことなく不思議で――
小鳥たちもさえずりを止め、少女の周りに集まった。

　「まあ、いつのまにかこんなにたくさんの小鳥さんがいらしてたのね。」
少女は小鳥たちを見て笑った。
「あら、あなたは小鳥さんたちのお友達かしら？」
少女は、少年を見つけるとまた笑った。
少年は不思議そうに少女を見た。少女は、そんな少年を見てきりかぶから立ち上がった。
「私は、あのおうちに住んでいますのよ。」
そう言って、近くの山のてっぺんにたっている大きな家を指差した。
「あなたは、どこに住んでいますの？」
「…僕の家はこの森だよ。」
少年は、少し恥ずかしかった。あんな大きな家に住んでいる少女に、『家が森だ』なんて言っている自分が。
「まあ、毎日小鳥さんと一緒で楽しそうですわねー！！」
でも、少女は瞳を輝かせて少年を見た。それから優しく少年の手をとった。
「うらやましいですわ。あのおうちはとても退屈で、ちっとも楽しくないんですもの。」
少年はとても驚いた。
「君は変わってる。あんなに大きくて立派なおうちに住んでるのに、僕をうらやましいだな

んて。」
少年は少女から目を逸らした。
「あら、あなたの方が大きな森に住んでいるのではなくて？」
そう言って少女はいたずらに笑った。
「お父様やお母様はいらっしゃらないの？」
少女は少年の目を見つめて言った。
「…僕はずっと１人。小鳥たちと遊んで、魚を捕まえて食べたりしてるよ。」
「そう…。あなたも１人なのね。」
「あなたも？」
少年は首をかしげた。
「私の両親は、ずっと遠い地でお仕事をしていて、もうしばらく会っていませんわ。お手伝い達も仕事が終わったらさっさと部屋に戻ってしまって、いつも私は１人で遊んでいますのよ。」
少女は哀しそうだった。
「私は歌うのが大好きで、おうちのお庭でよく歌うのですけれど、そのたびに執事に“女の子が大声ではしたない”って怒られて…。」
「それで、この森に来たの？」
少年は、いつのまにか少女の手を握り返していた。
「ええ。こっそり逃げてきてしまいました。でも、思いっきり歌えてとても楽しかったですわ。」
少女は笑顔になった。
「僕には、昔の記憶が全くなくて、いつのまにかこの森にいたんだ。ずっと１人ぼっちだった。小鳥たちがいてくれたおかげで寂しくはなかったけど、やっぱり人間の友達が欲しかった。」
少年は俯いた。
「だったら、私とお友達になりましょう？」
「え…？」
「あなたは、私の歌を聴いて、私に会いに来てくれた。それって、とっても素敵なことですわ。それに…。」
「そ、それに？」
「私もあなたも１人ぼっち。でも、ずっと一緒にいれば１人ぼっちじゃなくてよ。」
少女は少年に抱きついた。嬉しくて嬉しくて抱きついた。
「ちょ、ちょっと…。」
少年は少し顔を赤らめた。
少女はそっと少年から離れた。
「…あなたの記憶がどうして消えてしまったのか、どうすれば元に戻るのか、残念ながら私にはわかりません。でも、きっと無理に思い出そうとしても辛いだけですわ。」
少年は泣きそうだった。会って間もない自分に対して向けてくれる少女の優しさにふれて、ぬくもりを感じて。

これが愛情、なのかな。
「だったら、今から私と新しい思い出を、記憶を作りましょう！」
少女はそう叫んだ。
「新しい、思い出？」
少年の声は震えて、とうとう涙が流れた。
「そうですわ。私と、あなたで。」
少女は、少年の胸に手をあてた。
「きっと楽しいわ。」
それから、笑った。とびきりの笑顔で。

　「約束だよ。」

　少年は、少女の笑顔につられて笑った。初めて笑った。
少女はそんな少年を見て、ゆっくりと小指を差し出した。
「ゆびきり、ですわ。あなたと私で新しい思い出を作るっていう誓いです。」
少年は少し驚いて、さしだされた少女の手を優しく包み込んだ。
「どうしましたの？」
「…誓いって、こうやるんじゃないの？」
少女が驚くまもなく、少年は少女の手を引っ張って少女を引き寄せた。
そっと、唇がふれあった。
少女は一気に顔を赤くした。
「な、なにを…！！」
「なにって、誓い。小鳥たちはいつもこうやってるよ。」
少年はきょとんとした顔で言った。
「鳥と人間は違いますわ！」
少女は少し怒った。でも少年はどうして少女が怒っているのか分からなかった。
「…こんなことまでしたんですから、絶対に楽しい思い出を作ってみせますわ。」
「誓ったんだから、当たり前だよ。」
少年は笑顔になった。
少女は少年を見て、ため息をついた。でも、少年の笑顔につられて少女も自然と笑顔になった。

　少年は、１人の少女に出会った。
　それはそれは美しい歌声の少女に。

ＫＯハンマー

魔王というと大体ゲームとかのラスボスに使われる。
勇者は世界を救うために悪さをしている魔王を倒す、なんてのが典型的だろう。
ならば悪さをしていない魔王ってのはどうして倒される羽目になるのか。
「今みたいに油断してたんじゃない？」
なるほど、と納得して思考停止。
今の誰？　なんていう疑問も考えている暇がなかった。
後頭部でピコリとファンシーな音と共に、重い一撃。

魔王はピコハンで倒されてしまったらしい。

ぐらりまだ意識が揺らいでいる。
何とか目覚めた魔王は、何が起こったのかをすぐに理解しようと重い頭を持ち上げた。
「……おい」
いつも自分が座っていた王座が視界に入る。
同時に、その椅子の上に見知らぬ少女も映った。
「貴様、誰だ」
三白眼でその少女を睨む。
少女はピコハンを器用に回しながらこちらを見下した。
「口のきき方がなってないんじゃない？　元、魔王様」
「何だと？」
はっと気付く。
自分から禍々しい力が消え去っている。
代わりに、魔王としての膨大な力はその少女から感じられた。
「魔王を倒した私が、新しい魔王様になっちゃいました」
「ふざけんな！　ピコハン如きで俺がやられるなど……！」
「現にやられちゃったよ」
言葉に詰まる。
確かに、魔王だった自分がただの人間になっている事実は認めざるを得ない。
ただ、不意打ちでしかもピコハンなどというふざけた倒され方をしたのは許せなかった。
ギリギリ歯軋りしている魔王を見て、少女はにやにや笑顔を貼り付けて言う。
「そんなに魔王の力を返して欲しいなら、自力で取り戻してみたら？」
どこかで糸状のものが千切れる音がした。
「絶対奪い返してやるからな……っ！」
勇ましく殴りかかったのはいいが、やはり奪われた魔王の力で一蹴された。

魔王が少女に倒されてから一週間。
今日も変わらず少女に挑むも、圧倒的な力差で蹴散らされる。
「マオ、おやつ作って」
「貴様は俺をバカにしてるのか」
マオというのは、少女が魔王に付けた名前だ。
なんでも名前がなければ呼ぶ時に困る、と名前のなかった魔王につけたのだ。
「私はフィンって言ったでしょ。マオもそう呼んでよ」
「そう思うなら魔王の力を返せ」
首を横に振るフィンという少女。
そしてさっさとおやつを持ってこい、と無言の命令。
仕方なく、舌打ちをして長年使ってなかった食堂へ向かった。
「……そういえば、何も置いてないな」
魔王という存在は何かを食べたいと思うことはあっても、腹が減ることはなく。
ゆえに食料を置いていない。人間らしいものどころか、生活感というものがないのだ。
まだ腹が減るということは、そんな魔王になって日が浅いためだろう。
「(俺が魔王になった頃もそうだったか……)」
無駄だと分かっていても随分使っていない冷蔵庫を開いて確認。
何百年か前の何かでも残っていればいいと思っていたが、新品のように空であった。
「(俺の時は……魔王の座を狙う奴らが多くて、毎日荒れてたな)」
大体がモンスターと呼ばれるものが魔王城に攻め込んできて、100年に一度程度に勇者がきた。
今回も、そうかもしれない。
ここ最近は血の気が多いものも少なく、それほど派手に魔王が交代した訳でもないので多少は安全だろうけど。
「(別にあのガキのことを心配しているんじゃない。奪われた俺の力を取り戻すまでは生きていてもらわねばならないだけだ)」
とにかく材料がなければおやつを作ることも出来ない。
そうだ、魔王であるフィンが自分でおやつを生み出せばいいではないか。
馬鹿らしくなってすぐにフィンの元へ戻る。
「おいガキ、お前が自分で作ればいいだろうが」
「あ。さすが先代魔王様、頭いいね」
「ふざけてんのか」
さっそく魔王の力を使ってミルフィーユを生み出すフィン。
最初からそうしてて欲しかったと思う。
「……ガキ、俺がここに戻ってくるまでに何か殺気……みたいなものはなかったか？」
「いきなりガキ呼ばわりって酷くない？　うーんと、なかったよ」

そうか、と言って会話を切り、窓に近づく。フィンはそれ以上気にしなかった。
魔王だった頃は日差しが好きではなかったが、邪気がなくなったせいかそこまで嫌気はしない。
窓から外は、驚くほど穏やかでここが魔王城などとは思えない。
先ほど気にしていたことも、すぐには起こらないだろう。
「マオは今のままじゃ私に勝てないから、修行とか行ってきたらどう？」
「そんな面倒なことはしない」
せっかくの提案を蹴られてむくれたフィンは、ミルフィーユをヤケ食いし始める。
そんなことをするよりもフィンを倒す方が早いのは、彼女にも分かるはずなのだが。
「俺は絶対貴様から離れるものか」
「……私を倒すっていう理由がなければキュンと来るんだけどね」
フィンのため息をマオは理解できない。
ミルフィーユを食べ終わったフィンは足を組んでピコハンを手にふてぶてしく座り直した。
「じゃあさ、掃除洗濯炊事をしてくれるのならここにいていいよ」
「俺は主夫か」
「だって私が魔王なんだもん。つまり私が城主なんだもん」
その定義に反論する前に、魔王の力で違う部屋に飛ばされた。
今更ながら魔王って、ずるい。
窓からの日差しからして、さっきの場所よりも高い部屋のようだ。
つまり洗濯物でも干してこいということか。
「……くそ」
既に怒る気も失せている。
せめてもの反抗として、思いっきり窓を開いた。

さすがに何ヵ月も無力でいると、この状態に慣れてくる。
今ではすっかり使用人と同じ扱いだ。しかし力を取り戻すことを諦める気はさらさらない。
「(だが、何かキッカケがないと……)」
慣れ過ぎて、自分が魔王だったことを忘れてしまう気がする。
それには危機感を覚えざるを得ない。
そう、些細なことでいい。フィンの力が弱まることがあれば。
ピリ、と微かな緊張を感じ取った。
運んでいた食材もその場に投げ捨て、走り出す。
この懐かしい気配は、あれだ。
勇者。
「(チッ……タイミングの悪い！)」
無駄に広い魔王城の、大広間へ向かっていた。

近づいてくにつれて禍々しい感じが増していく。
これは、本当に勇者なのか？
「フィ」

「結局は理由付けて正当化してるだけでしょ！」

フィンの罵声が飛んでいた。
いつもの少女のようでなくて、呼びかけた名前を飲み込み曲がり角に隠れる。
視線の先にはフィンと同じ翡翠色の短髪をした、勇者の姿。
映える大剣が嫌に似合う。
ただ、どこか違和感はあった。
「フィン、どうしてお前が魔王なんかになっているんだ？　それじゃあ、世界を平和にできないだろ」
「何を躊躇してるの。実の妹が魔王だから倒せません、なんて今更兄貴振るのやめてくれない？」
兄妹？
ならば、どうしてフィンは魔王なんかになったのだ。
わざわざ勇者に殺されるような真似をする、その行動の意図が読めない。
……ふと、どうしてフィンを理解しようとしているのかと疑問に思った。
何を心配しているんだ。
兄であるらしい勇者と勝手に命の取り合いをして、弱ったところにトドメを刺せばいい。
あくまで、他人事だと割り切って。
「文句、言うなよ」
「やってみな、バカ兄」
聞き取れたのはそこまで。
ただの人間に成り下がったマオには、その威圧に耐えられなかった。
背後の廊下の方へ吹き飛ばされる。ごろごろ転がって、床に倒れこんだ。
情けない。
「(……あのガキ、魔王の力使いこなせるのかよ)」
大の字のまま、起き上がらず呼吸を整える。
魔王なんて強大過ぎる力、何ヵ月でモノにできるどころか何年でも足りない。
特に難しい高等魔法なんて片鱗すら見せることは無理だろう。
簡単なものならば、最初のマオの抵抗のおかげで扱うことは可能かもしれないけれども。
「だがあの勇者……違うな、フィンの兄貴か。あいつは、気に入らねぇ」
目に映った瞬間から違和感というか、嫌悪感を抱いていた。
あれは魔に相対する者ではなく魔と絶対する者なのではないかと。
「相当な手練だろうな、城壊されるかもしれない」
それよりも心配していることがあるだろう。自分で間違いに気付かせる。

傍観している身で偉そうなことを言えたものではない。
ふらふら上半身を起こして座る。
その時ぶおっ、と前方から熱風が吹きぬけた。
じわり汗が流れる。焦っていた。
「(何を迷っているんだ俺は……。このままじゃフィンが倒されて、魔王の力だって消えちまう)」
気づいた時には後先考えもせず立ち上がっていた。
人間になったマオに何が出来るかなど問題ではない。
火薬のにおいと、途切れない切断音が響いている。勇者にすれば負けられない戦い、手を抜く理由がない。
「どうして……上手く使えないの！」
焼けたにおいは不発した魔法。先ほど吹き飛ばされた位置にまで戻ってきたマオは、見慣れた光景に唾を飲み込んだ。
どう見てもフィンが押されている。やはり応戦が出来ないのだ。
「いい様だな、所詮即席の魔王では仇討なんてできないぞ」
「……分かってんなら、なんで勇者なんかになったのよ」
「そりゃお前を護るためだ」
「私を理由にするな！　そんな平穏ならいらない！」
炎を放とうでもしたのだろうが、振りあげたか弱い腕は軽々振るわれた大剣によってはたき落とされた。
そのまま殴られて床に叩きつけられる。
素早く近づいた勇者はさらに大剣をフィンの上で振りあげた。
「うっ！？」
マオが勇者に向かって横から突撃、体勢を崩す。
その時に刃先がマオへ向き、片腕を斬られた。
「マオ！」
「トドメ刺されそうになってんじゃねぇよ……。あんなクソ野郎、さっさとのしてくれ」
「……できないよ」
うなだれるフィンと同時に体勢を崩された勇者が起き上がってくる。
「貴様が勇者だな。……だが、俺の目はそんな善人にみえねぇな」
「善人？　そんな大層なものは求めてないさ。正義という肩書きが欲しいだけ」
「フィンより兄貴の方がよっぽど悪か。曲がった世の中だ」
強がっては見るがフィンを守る手立ては思いついていない。
自分がもし魔王ならば、つべこべ考えずにいられるのに。
「……やっぱり、私に魔王は向いてなかったみたいだね」
「諦めるなよ。俺が守ってやるから」
庇うフィンがそろそろとマオに何かを渡してきた。

赤と黄色がよく目立つピコハン。マオを倒した武器だ。
「魔王だったんだもん、こういうのが必要なのは分かってるよ」
少し考えたあと、マオはそのピコハンを受け取る。
フィンが魔王ではなく、幼い少女に見えたから。

今はもう無力な人間ではない。

大剣とピコハン。ふざけているようで緊張感が場を占める。
ぶん、と振るわれる大剣を赤い本体で受け止めた。
「そうか、本来はお前が魔王だったんだな」
少女とは違うものを感じた勇者は武器に込める力が強くなる。
プラスチックで出来たハンマー。しかし斬り落とせない。
「悪いけど、貴様は俺を倒せない」
ぐるり手首のねじりだけで剣がはじかれた。
一度後退するも、翻る闇が勇者の足を捕える。
「貴様と因縁すらない俺は、容赦しない」
「(堅い……！)」
影が振りかかる。それは人のものではなく、手に持つ鈍器。
魔王の力で巨大化したピコハンである。それが纏う、揺らめく黒い炎も見えた。
「貴様は勇者でも、正義なんて認めねぇ」
持ち上がった大剣を思い切り踏み倒す。刃と床をガリガリ削った。
ちょっと本気を出した程度で恐れ慄く情けない勇者を見下す。
「たまにいるんだよ、貴様みたいに勘違いして何も救えない愚か者。そんな奴らが正義を掲げるなんて、世の中腐ってるだろ？」
強大な魔王の威圧感と魔力に圧倒されて何も発せない勇者。
弱すぎる、と思った。
こんな奴は勇者である資格も、フィンの兄である資格もない。
ピコハンをしっかり握って振りあげる。
――フィンから聞こえたのは、さよならだった。
「だから俺なんて存在がいるんだ」
せめて残骸は、残らないように。

「フィン、魔王の力返したんじゃないのかよ」
のどかな日常。魔王城と言えども来客がない時は何もないのだ。
そしてマオは使用人に元通り。フィンも元気に魔王の力を揮っている。
「あの時は貸しただけ。だから、今度はマオを助けられるように修行しているのだ」

「そもそも、俺に返したら済む話だぞ」
武器となったピコハンは、今もフィンの手元にある。
フィンはあのピコハンがエクスカリバーか何かと信じきっているようだが、実際はそうではない。
マオを倒せたのは、あれを使ったフィンが正義だったため。
勇者の時に使った理由としては、マオがそういう魔王だからだ。
「(俺が正義を裁判する魔王、だったからハンマーみたいな鈍器と相性が良かっただけなんだよな)」
それはともかく、フィンがやる気なのはいいことなんだろうか。
「あのね、私が魔王になりたかったの、お兄ちゃんのことだけじゃないよ」
ふと、マオが嫌々用意したホットケーキで休憩をしている頃、フィンが話し出した。
「仇討だけじゃなかったのか」
「私の好きだった人、の仇討ちはお兄ちゃんを止めることで終わった。そんなんだったら魔王じゃなくてもいいじゃない」
フォークを軽く振り回したあと、思い出したことに肩を落とすフィン。
「生き返らせたかったんだ、ドルくん」
ホットケーキに伸びる手が止まる。
フィンはドルという人を生き返らせるために、魔王になりたかったのだった。
蘇生なんて神様の領域、そこまで踏み入れる力がまだないことに落ち込んでいるんだろう。
魔王とて、そこまで出来ないとは知らないで。
「……俺が代わりになってやるよ」
「マオ」
「そいつの代わりに、俺が傍にいてやる」
それだけ言ってマオは先に食べ終わったホットケーキの皿を持っていく。
フィンの分が、一枚増えていた。
「慰めのつもりなの？　もういいんだよ、ドルくんのことは」
それともまだ魔王の力を奪い返したいのか。しかし、今回はそんな裏の意味を感じることが出来なかった。
本当に、これから守ってくれようとしている。
熱くなる頬に表情が綻んだ。
「本当は君、ドルって名前でしょ？」
どうして魔王だったのか、どうして生きているのか。
辻褄の合わない時に何があったのか分からないが、マオとしてもう一度フィンの傍にいる。
それだけでフィンは幸せだった。
「でも私、そのままのマオが好きだから」
聞こえるはずもない気持ちをそっと呟き、静かな大広間で一人笑顔になる。
今頃マオは、広い城の掃除に行っているだろうと予想しながら。

魔王と少女の物語。

それが俺らの青春さ　vol.6

http://p.booklog.jp/book/23836

著者 : 千里青雲文芸部
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/passer/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/23836

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/23836